



赤い羽根共同募金作文・ポスター作品コンクール 2018 最優秀賞

災害での支え合い

八戸市立函南小学校 5年 古川玲奈

「お母さん、激甚災害ってなあに。」

と私はテレビのニュースを見て、話しかけた。

ニュースの映像は、大雨で住宅だけでなく、町全体がすっかり変わり果てていた。それでも、住民たちは、かなりの暑さの中、流れ込んできた土砂の後片付けをただ必死でやっている。土砂で道路も使えず、水道も電気もガスも使えないなんて、とても大変そうだなと思うとともに、とても怖くなった。

「あなたも東日本大震災を4歳の時に経験しているのよ。」

と母が話した。

「あまり覚えてない。大変だったの。」

と聞くと、母は、

「津波とか原発とか、予想以上に怖かったけれど、家には被害がなくて、家族みんながまともだったから、水や食べ物、電気などなんとかなったのかもしれないよ。」

と言った。けれども、当時のことは、4歳の私の記憶にはあまり残っていない。怖かったこと、寂しかったこともあまり記憶には残っていない。きっと、兄や弟や私が怖がらないように、父と母が、電気がなくても、水道が使えなくても不便にならないように必死で守ってくれていたからだと思う。電気が止まってしまうと、信号も消え、スーパーの冷蔵庫、自動ドア、レジ、様々なものが使えなくなり、町全体から音が消え、動きが止まってしまうのだとか。そんな中、父と母が食事を用意して、灯りをつけてくれて、ストーブをつけて暖めてくれたことを考えると、今でも私の心の中はありがたい気持ちでいっぱいになる。そして、西日本豪雨の被害を受けた方々にも、様々な支援が行き届き、みんなの「困った」「怖い」が少しでも減って、「助かった、ありがとう」の気持ちに変わってくれたらなあと思い、町で募金箱を見つけると、思いが届くようにと募金をするようにした。

小さな子供や、ペットを飼っている人、障害を抱える人、お年寄りたちは、避難所に行こうかどうか迷ってしまうと聞く。避難を迷う理由は、周りの人に迷惑をかけてしまわないかと考えてしまうからだと思う。しかし、地域の人たちがふだんから顔を合わせ、あいさつをしたり、一緒に清掃活動をしたり、健康作りをしたりして良い関係を作っていれば、災害の時にでも声をかけ合い、遠慮なく助けたり、助けてもらえたりすると思う。それが、災害に強い町、元気な町、住み良い町になるのだ。

赤い羽根共同募金を通じて、どんなに小さな町や地域でも、災害に備えられるしくみができて、よりよい町になってほしいと思う。さらに、人と人とのよりよい関係を作ることにより、どんな災害にも備えられ、安心してらせる町になると思う。「小さな町でいきる大きな関係」を大切に、自分の住む町、人を大事にしたい。